

近代中国語敬辞の文脈条件の一考察

彭 国 躍

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. はじめに | 4. 場面の文脈条件 |
| 2. 文化的文脈条件 | 4.1. 初対面の場面 |
| 2.1. 実体概念の価値認識 | 4.2. 出迎いの場面 |
| 2.2. 性状概念の価値認識 | 4.3. 贈答の場面 |
| 3. 人間関係の文脈条件 | 5. 文体の文脈条件 |
| 3.1. 身分関係 | 6. 共起関係の文脈条件 |
| 3.2. 年齢関係 | 7. 結び |
| 3.3. 親疎関係 | |

1. はじめに

近代中国語の敬辞は中国文化における陰陽カテゴリーの構造を通して表現されていた。陽のカテゴリーに属する概念「大、貴、尊、高、令、雅、賢、明、龍、鳳、玉、金、光…」などは他者への尊辞表現として使われ、陰のカテゴリーに属する概念「小、賤、卑、下、拙、劣、俗、愚、貧、寒、犬…」などの表現は自己への謙辞表現として使われていた。（近代中国語の敬辞体系について詳しくは彭1995a,bを参照されたい）ところが、実際に陰陽のカテゴリーに属する概念は、すべて敬辞として使用されたわけではない。敬辞の成立と具現の過程には、様々なレベルでの文脈条件が加わったと見られる。ここで、文脈という用語を広義的な立場から、発話の前後の脈絡だけでなく、発話を取り巻く文化的、社会的環境を含めたものとして解釈する。この解釈に基づき、敬辞が成立する文脈条件を大きく非言語的文脈と言語的文脈の二つに分ける。非言語的文脈は、更に、文化的文脈条件、人間関係の文脈条件、場面の文脈条件などに下位分類し、言語的文脈条件は、文体の文脈条件と文の中における語彙間の共起関係の文脈条件に二分する。

敬辞はそれぞれのことばの字義的意味を通してメタファー的に表現されるので、そのメタファーが理解されることを保証する文化的環境がまず必要である。例えば、自分の子供を「犬子」と表現する場合、それが嘘や冗談などではなく、自分のことを礼儀正しく表現しているというこ

とを推論し得るような共通の認識基盤が必要である。この敬辞メタファーの共通理解を支える文化的環境のことは、ここで文化的文脈条件と言う。

文化的文脈条件は、敬辞理解のバックグラウンドをなすものであるが、個々の発話で、敬辞を使う必要があるかどうかの判断は、発話に関与した人間同士の関係と発話の場面などの使用条件によって規定される。

文化的条件、人間関係の条件、場面の条件などの非言語的文脈条件が揃えば、敬辞が必ず出現するとはかぎらない。敬辞の使用は、更に、言語的文脈条件の制約を受ける。言語的文脈の中で、まず文体の条件がある。書き言葉、話し言葉など言語表現のスタイルの違いによって敬辞を使用するかどうか、どの表現を選択するかなどが規定される。そして、言語的文脈の中で敬辞使用の文体条件が満たされた後、更に文における語と語との間の共起関係の条件が必要となる。二つの語の間に意味内容が共起できるものとできないもの、共起しやすいものとしにくいもののが存在する。

以下、敬辞表現はいかにして様々な文脈条件を通して具現していくのか、そのプロセスを解明したいと思う。

2. 文化的文脈条件

そもそも敬辞が成り立つ根拠とは何か、それをひとことで言うと、そのことばに含意された価値的意味である。ある表現を敬辞とみなすためには、その表現の中に一次的意味内容にせよ、二次的含意内容にせよ、価値認識がそこに含有されることが必要である。プラスの意味（または含意）を持つ表現で相手のことを表したから待遇的な効果が生まれたのである。価値的意味を持たず、よくも悪くもないことばを使って相手の行為を表現しても待遇的な効果をもたらすことができないのである。ことばの価値的意味を規定するのは、文化的価値観である。以下近代中国語の敬辞の文化的文脈条件について、実体概念を表す敬辞「犬～」と性状概念を表す敬辞「大～、小～」という二つの事例を通して考察する。

2. 1. 実体概念の価値認識

まず、実体概念が敬辞として使われる場合の文化的文脈条件を見てみる。その一例として「犬」という動物概念を取り上げる。犬について、われわれは様々なレベルや角度から特徴付けることができる。生物学的な定義のように犬という生き物が生来備えた性質に基づいて特徴付けることもでき、また現実生活の中で犬との接触を通じてわれわれが受けた印象、感じた犬の性格、そして人間社会の中における犬の役割、人間など他の要素との関係など外の様々な観点

から特徴付けることも可能である。犬については、次のようにA、B、Cの三つのレベルから特徴付けることができる。

「イヌ」：A [動物，哺乳類，4本の足]

B [i 忠実，可愛い，賢い，人類の友]

[ii 隷属的，被支配的，卑しい]

C [陰]

Aの特性は，生物学的な立場から，対象が固有する性質に基づいたものである。Aの特性の判断基準は見る主体側の個人，集団，文化の見方によらず，客観的である。Bの特性は，日常生活の経験を通して主観的に決められた二次的特性である。この特性は日常生活における犬の役割，犬に対するわれわれの部分的経験によって認識される。それは，われわれの経験の仕方，感じ方に直接影響され，ある種のステレオタイプのな性質を帯びている。そこに往々にして価値的評価が含まれる。例えば，B i の特徴は，犬に対してプラスの価値評価が中心で，欧米などの社会において一般的に認められるものであるが，それに対して，B ii の特徴には，マイナスの価値評価が賦与され，伝統的な中国社会での一般的な認識である。Aの特徴に比べて，Bの特徴は，純粹に客観的なものではなく，文化による視点の相違が見られる。Cの特徴は，犬のB ii の特徴に基づいて，中国文化における世界の陰陽モデルの中での特徴付けである。「隷属的，被支配的，卑しい」という性質は陰陽の枠組みの中で陰のカテゴリーに属する性質である。主人の言うことに従って行動し，主体性がなく従属的であるという部分的な経験によって，犬は卑しい立場にあり，陰のカテゴリーに帰属する動物として位置付けられる。このような位置付けにより，同じ陰である自分と「犬」との間に類似性が生じ，自分のことに関して「犬子（息子＜犬の子供＞）」，「犬婦（家内＜犬の妻＞）」などと表現することは，陰陽秩序を守ることにつながり，バランスの取れた平和な人間関係を保ち，礼儀正しいことになる。そして，逆に他者を犬と関係付けて表現することは，中国社会においては，平和な人間関係を破る意図的な非礼行動になり，一種の卑罵表現になる。例えば，「狗腿子（意気地なし＜犬の足＞）」，「狗崽子（畜生＜犬の子供＞）」，「狗東西（畜生＜犬野郎＞）」，「挂羊頭賣狗肉（嘘つき＜羊頭狗肉＞）」などである。犬に対するB ii，Cのような価値付けや特徴付けは，発話者一人一人の人間が犬についてどう思うかによるのではなく，その社会や文化の中で，基本的に犬をどう捉え，位置付けるかによるものである。もし犬に対するこのような文化的価値観の背景がなかったら，犬にまつわるこれらの敬辞表現や卑罵表現も成立しなかっただろう。

敬辞として使われた事物概念，例えば「金，玉，龍，鳳，光，芝…／磚，犬，豚，草…」などを表すことばにはすべて価値的含意が含まれている。文化的価値観に依存するこれらの価値含意が敬辞成立の土台になっているのである。

2. 2. 性状概念の価値認識

われわれの価値認識は事物概念にとどまらず、ある性質や状態の概念にも及ぶ。次に物理的の大きさを表す性質概念の事例を通して、敬辞成立の文化的価値観の条件を見てみる。自然科学、とりわけ物理学のような客観的な立場から見ると、物の大きさの違いは単なる量的な違いである。そこに善し悪しに関する価値的な評価が入る余地はないのである。物理学では、無価値または同一価値の世界を想定し、その仮説の上に立って物理的世界の構造や運行規則を研究するものである。したがって、このような立場によれば、物理的に大きいことは、よいこととも悪いこととも言えないのである。しかし、現実には人間は、日常このような無価値の世界に生きているわけではない。実際の生活では、人間は何らかな形で、ある物や性質、状態に対してある価値的判断を下し、その価値付けされた環境の中で生活するのである。例えば、富士山は自然科学の立場から見れば、ただの海拔3776メートルの休火山にすぎないが、日本文化においては神聖な山としてほかの山より高い価値が認められる。

中国文化における価値について、二つのレベルを考える必要がある。一つは、身の回りのことに対する善し悪しの即時的な価値判断である。それを「善／悪」という。善悪の関係概念を、ここで狭価値と呼ぶ。もう一つの価値レベルは、世界全体を一つの価値世界として捉え、そこにある統一した価値関係を意味するものである。このすべての現象に遍在するものとして理解された価値概念は、「陰／陽」概念で表される。ここで、陰陽によって表される普遍的な世界の価値構造を「汎価値」と呼ぶ。狭価値は、汎価値の中に含まれることになる。

中国文化の陰陽価値観によれば、善いことは陽で、悪いことは陰である。そして大きいことは陽で、小さいことは陰なので、大きいことと善いことが同一の価値——陽を持ち、小さいことと悪いことは同一の価値——陰を持っている。「大」と「善」、「小」と「悪」の間の等価関係に基づき、中国社会において、「大きいことはよいことで、小さいことはわるいことである」という、物理的サイズに関する一般的な価値観が成立する。この価値観に基づいて、他人のことを大きいものとして表現することは、他人を誉めることにつながり、自分のことを小さいものとして評価することは謙遜することにつながる。たとえば、敬辞として、他者のことについて「大名（お名前）、大作（ご作品）、大人（旦那様）」と表現し、自己のことについて「小疾（私の病気）、小店（私の店）、小人（私）」などと表現する。そして、逆に自分のことを「大～」、他者のことを「小～」と表現するのは、尊大表現と卑罵表現になる。

大きいことはよいことであるという一般的価値観は、多くの社会や文化に認められる。しかし、それはすべての人間社会に共通する絶対的な価値観ではない。文化又はサブカルチャによってはそれと反対する価値観を有する社会もある。例えば、ヨーロッパのトラピスト修道会のような社会では、物質を所有することに関して、「より小さいことはよりよいことである」

という価値観を持っていると言われている。(G. Lakoff and M. Johnson 1980) このような価値観を有する社会では、当然相手のことに関して「大きい」と表現することは、決して相手を誉めることにならないだろう。勿論、このような価値観を持っているからと言って、必ずしもそれを反映するような敬語体系が成立するとは限らない。しかし、少なくとも中国社会において相手のことを「大～」、自分のことを「小～」と表現するような敬語現象があるのは、大きいことはよいことで、陽であり、小さいことはよくないことで、陰であるという価値観が文化的文脈条件としてその基底にあるからだと言うことができる。

「尊、貴、雅、上、厚、老、賢、清、明、芳、豊…／卑、賤、敝、拙、俗、下、薄、微、愚、貧、寒…」などの性状概念がかかわる中国語の敬辞は、以上の「大／小」の事例で示されたのと同じようにいずれも中国社会の文化的価値観の背景の中で待遇表現として機能したのである。

3. 人間関係の文脈条件

文化的文脈は、敬辞の形成に大きな影響を与えた要因であるが、具体的な言語活動の中で敬辞の使用を動機付ける最も中心的な役割を果たす文脈要因は人間関係の条件と言える。人間関係は様々な角度から規定できるが、敬辞使用と直接かかわるものとしては、社会的身分の上下関係、年齢における上下関係、社会的距離における親疎、ウチソトの関係などが考えられる。以下、このような人間関係の文脈条件が近代中国語敬辞の使用に与えた影響について、近代小説に現れたいくつかの事例を通して考察したい。

3. 1. 身分関係

社会的身分の上下関係が敬辞使用を動機付ける事例について、まず小説『金瓶梅詞話』の中に現れた名前の聞き方の例を上げる。

この小説の中で同一人物西門慶がそれぞれ身分の違う複数の相手に対して名前を聞く発話があった。(＜ ＞内は敬辞の字義通りの意味を表す)

- (1) 你四人叫甚名字？(お前たち名前何と言うの。)[西門慶→芸者]
- (2) 你姓什麼？(名字は何と言うの。)[西門慶→召し使い]
- (3) 敢問尊号？(＜尊い＞お名前は何とおっしゃいますか。)[西門慶→安主事(役人)]
- (4) 老先生尊号？(＜年とった＞先生の＜尊い＞お名前は何とおっしゃいますか。)[西門慶→秀才]

西門慶という地方の一豪族の家の主人は、(1)、(2)のような身分の低い芸者や召し使いに名前をたずねる場合、敬辞ぬきで、しかも、姓や名について聞いているが、一方(3)、(4)のように、

相手が役職に就いた人や学問的地位の高い人に対しては、「尊」という尊辞を使って表現し、しかも、姓と名を直接聞かずに、そのあざなとしての「号」を聞くのである。(4)の学問的地位の高い人に対して、「尊」の外に「老」、「先生」という尊辞表現も使われている。

この例を通して、同一人物の話し手が同一命題内容に言及するのに、敬辞を使ったり、使わなかったりしたのは、相手の社会的地位の高さが文脈条件として影響したからだと言えることができる。

身分の上下関係が敬辞使用に影響を与えたもう一つの例を上げる。陰陽価値観の枠組みでは、年上は陽、年下は陰、そして、家族内の秩序として、世代や年齢の上位成員、例えば、祖父母、親、おじ、おば、兄、姉などは陽で、世代や年齢の下位成員、例えば、弟、妹、息子、娘、孫などは陰である。したがって、中国社会において他者を年上の者、家族の上位成員として表現し、自分を年下の者、家族の下位成員として自称することが礼儀的である。どんな相手をどの程度の年上者として扱うべきかは相手と自分との年齢関係だけでなく、身分関係にも影響される。

ここで、身分関係に基づく例を上げる。親族呼称の使い方には、社会的身分が上がれば、上がるほど、使われる呼称が家族構成内の上位者のものになる傾向がある。そのことは『金瓶梅詞話』の地の文の記述からも窺うことができる。豪族西門慶家の使用人韓道国という人は、ある日会計の地位に昇格した。すると、これまで韓夫婦のことを名前で呼んでいた近所の人々は、急にその呼び方を変えた。

- (5) 那中等人家、称他做韓大哥、韓大嫂。以下者、趕着以叔瀋呼之。(中流階級の家の者は、韓兄さん、韓姉さんと呼び、身分の低い者はへつらっておじさん、おばさんと呼び始めた。)
- 『金』39章

この記述は、同一の人間に対して、身分の低い話し手ほど、上位親族呼称を使う傾向を示し、親族呼称敬辞の使用は、発話参与者間の相対的な身分関係の制約をも受けることを如実に物語っている。

3. 2. 年齢関係

近代中国社会において、外の条件が同じであれば、基本的に年少者が年長者に対してより多く敬辞を使用する傾向があったようである。敬辞使用への年齢関係条件の制限について、近代小説『儒林外史』に現れた例を上げる。同小説の中に、見知らぬ二人、青年の牛浦と老人の牛瑤が旅先で出会う場面がある。その場で、二人は次のような会話を交わした。

- (6) 牛浦道：「拜問老先生尊姓？」那人道：「我麼，姓牛，名瑤，草字叫做玉圃，…你姓甚麼？」牛浦道：「晩生也姓牛…」(「<年とった>先生の<尊い>お名前は何かとおっしゃいますか」と牛浦は尋ねた。「わしのこと、姓は牛、名は瑤、字は玉圃と言う。…君の名前は？」と老

人は言った。「<後輩の>わたくしも牛と申します。」と牛浦は答えた。『儒』22章

二人は初対面で、互いに見知らぬ間柄である。初対面の二人が互いに相手について持っている判断材料は、一目で分かる二人の年齢差である。若者が老人に名前を聞く場合、「拜, 老, 先生, 尊」などと敬辞表現を多く使っているが、老人が若者の名前を聞く場合は、敬辞を使わず直接「姓甚麼」と尋ねた。

二人の敬辞の使い方に見られる相違は、年齢関係によって影響されたと考えられる。

3. 3. 親疎関係

一般的な傾向として、家族など内輪の人間、親しい間柄の人間同士の会話に敬辞の使用が少なく、客など関係の遠いそとの人間との会話に敬辞が多用される。敬辞使用に対する親疎、ウチソトの人間関係の影響について、『金瓶梅詞話』の中の二つの例の比較を通して見てみよう。

(7) 又起動你媽費心, 又買礼来。(またお母さんに気を使ってもらって, おみやげまで持ってきてもらってありがとう。『金』79章

(8) 邊承光顧, 兼領厚儀, 所失迎迓, 今早又蒙老公公直房賜饌, 威德不尽。(先程は, 御光臨ありがとうございます。手厚い贈り物を賜りましたのに, 留守をしてたいへん失礼致しました。今朝ほどはまたご尊父から宿直所で御馳走にあずかりまして, ご厚誼のほど感謝にたえません。『金』70章

例(7)と例(8)は, 同一人物が他人からの見舞いを受け, プレゼントをされた時の発話であるが, (7)の場合は, 相手は話し手の隣人の娘で, 家族同様に付き合う人であるが, (8)の場合は, 話し手と同じレベルの官職を持つ他の豪族である。話し手は両方とも感謝のことばを述べているが, (7)の場合は, 相手のお母さんの気遣いに言及することによって表現し, 型通りの謝辞や敬辞は一切使われていない。一方, (8)の場合は, 話し手は「光顧, 厚儀, 威德」などの敬辞を使って礼を述べている。そこには, 身分関係や年齢関係もからんでいるが, 内側の人間同士の会話に敬辞を使わず, 外側の人間に対して敬辞を使うという親疎, ウチソトの人間関係条件が主な影響を与えたものと思われる。

4. 場面の文脈条件

敬辞の使用は, 更に様々な場面条件の制約を受ける。一般的にインフォーマルな場面よりフォーマルな場面において, 発話全体に敬辞が多く使用される。そして, 場合により, 特定の場面と特定の敬辞表現が常に共起し, 一種の定型表現として成り立つこともある。ここで近代小説に現れた「初対面」, 「出迎え」, 「贈答」などの場面における挨拶表現から, 敬辞と場面との関

わり方を観察する。

4. 1. 初対面の場面

- (9) 久仰温先生大才。(かねがね温先生のご高才をお伺いしています<仰いでいます>)『金』58章
- (10) 久仰賢名。(かねがねご高名をお伺いしています<仰いでいます>)『金』50章
- (11) 一向久仰尊府大名。(かねてからずっとお宅のご高名をお伺いしています<仰いでいます>)『儒』10章
- (12) 久仰大名，如雷漑耳。(かねがねお名前を謹んでお伺いしています<仰いでいます>)『儒』10章
- (13) 今得瞻二位老爺豊采。(お姿を拝見する<見上げる>ことができてうれしく存じます。)『儒』10章
- (14) 幸瞻豊采。(お姿を拝見する<見上げる>ことができて幸いです。)『儒』8章

初対面の場面は，親疎，ウチソトの人間関係条件とからんで，敬辞使用を要求する場面である。以上の初対面の発話に現れた敬辞の中に，特にその場面とだけ連動して使われたものが含まれる。それは「仰<あおぐ>」と「瞻<見上げる>」である。「仰」は，相手のことを噂で聞き，心の中で思い慕うという意味のメタファー表現で，「瞻」は相手に会うという意味のメタファー表現である。これらの表現は，実際には，初めて会う人に対する挨拶として使われることが多く，初対面という場面条件によってその使用範囲が制限される傾向が見られる。

4. 2. 出迎いの場面

- (15) 請問光降敝衙，有何見意。(わざわざお越しくださる<光が降りる>のは，何かご用でもありませんでしょうか)『白』12章
- (16) 孫老爹光降寒門，不知有何台命。(孫様があばらやにお越しくださる<光が降りる>のは，どんなご用件がございますか)『世』11章
- (17) 今幸光老爺光顧。(お越し下さって<光が訪れて>幸いに存じます)『蟹』17章
- (18) 多謝龍光。(お越し下さって<光を賜って>ありがたく存じます)『蟹』2章
- (19) 得蒙光降，頓使蓬華增輝。(わざわざお越し下さり<光が降り，草むらに輝きをお与え下さり>，ありがとうございます。)『金』31章
- (20) 今日幸蒙清顧，蓬華生光。(わざわざお越し下さり<家に光をおもたらしになり>，ありが

とうございます。)『金』49章。

客を迎える場面は、基本的に、敬意度の高い表現を要求する場面と考えられる。以上の例にも見られるように「敝、光、降、老、清」など多くの敬辞が使われている。しかし、ここで「光」を除いた他の敬辞は、この場面に限らず、他の場面でも広く使われているが、「光」は、他の敬辞と違い、他者の訪れを迎える場面に深く結び付いているようである。「光降（光が降りる）、光顧（光が訪れる）、寵光（光を下さる）、蓬華増輝（草むらに輝きを増す）、蓬華生光（草むらに輝きをもたらす）」など、表現の仕方は様々であるが、相手を光と譬えるメタファーは、相手が訪れてくる場面によって慣習化された傾向が見られる。

4. 3. 贈答の場面

送り手の挨拶：

- (21) 薄礼表情而已。（ささやかなく薄い>お礼の気持ちです）『金』75章
- (22) 些須薄物，聊展鄙忱。（ちょっとしたつまらない<薄い>物で，ぜひお受け取りください）『玉』11章
- (23) 聊具些小薄儀，用表微意。（つまらない<薄い>物で，ささやかなく微かな>気持ちとしてお受け取りください）『駐』16章
- (24) 些須微贐表情而已。（ささやかなく微かな>お礼の気持ちです）『金』36章
- (25) 薄具微物贈兄。（ちょっとした<薄くて微かな>物を差し上げます。）『駐』1章

受け手の挨拶：

- (26) 多謝你師父厚礼。（先生の<厚い>結構な送り物，ありがとうございました。）『金』39章
- (27) 小弟前日蒙恩兄厚賜。（先日<厚い>結構な送り物をいただいて，ありがとうございました。）『世』10章
- (28) 向蒙干兄厚惠。（<厚い>結構なおプレゼントありがとうございました。）『世』11章
- (29) 多承盛情。（<盛んな>お気持ちありがとうございました。）『金』75章
- (30) 屡叨盛賜。（度々<盛んな>結構な送り物，ありがとうございました。）『蟹』8章

贈答の場面で、送る側は、自分から送るものを「薄～、微～」と表現し、受け取る側は、その贈り物を「厚～、盛～」と表現している。謙辞と尊辞の中で、大きさ、高さ、貴さなど様々な性状概念の表現が含まれているが、贈答の場面では、「薄、微／厚、盛」が多く使われる。

このように、敬辞の使用と選択は、場面条件に影響される一面が窺われる。

5. 文体の文脈条件

文体の文脈条件は、伝達手段に関する言語スタイルの条件のことである。言語スタイルは大きく話し言葉と書き言葉に分けられる。話し言葉に、更にフォーマルかインフォーマルなどの発話場面に基づく発話スタイルの違いがあり、書き言葉には私信や公式文書などの文章スタイルの違いがある。どんな言語スタイルを選択するかは、敬辞を使用するかしないか、どんな敬辞を使用するかなどに影響を与える。ここでは、書き言葉、主に手紙文を通して文体の文脈条件が敬辞使用に与えた影響を考える。

一般的な傾向として、同じ書き言葉でも、相手を特定しない論文、散文、小説などの地の文などに比べて、特定の人間を読み手とする手紙に、敬辞がより多く用いられる。次の例(31)は、小説『金瓶梅詞話』の中で、ある豪族の奥さんが同じ身分の家の奥さんに宛てた手紙で、例(32)はある官僚が地方の豪族の主人に宛てた手紙である。

(31) 大徳周老夫人妝次

重承厚礼，感感。即刻舍具菲酌，奉酬腆儀。仰希。高軒俯臨。不外，幸甚。

西門吳氏端肅拜請

(大徳周令夫人御許に

度々のご厚志にあずかり，感謝致します。早速，粗酒を整え，ご返礼申上げたく存じます。幸にご来臨賜りますよう，伏してお願い申し上げます。

西門吳氏敬拜)『金』96章

(32) 大錦衣西門先生門下

兩次造擾華府，慄愧殊甚。今又辱承厚貺，何以克当？外令親荊子事，已具本矣，想已知悉。連日渴仰豐標，容当悉。使旋謹謝。

侍生宋喬年拜

(大錦衣西門先生玉案下

再度尊宅をお騒がせ申して誠に恐縮慚愧に堪えず，今また豪盛なる贈り物を頂戴いたし，お礼のことはもございません。御親戚，並びに荊氏の件については，すでに上奏ずみのこと，御存知のはずと存じ，拝顔の日を鶴首致します。いずれ拝眉の上ご挨拶申し上げたく存じますが，とりあえず御使に託し，謹んでお礼を申し上げます。

侍生宋喬年拜)『金』78章

両方ともプライベートの手紙だが，下線で示したように短い文章の中に敬辞が多く用いられている。その中で，特に宛て名の部分の「大徳（仁徳の厚い），大錦衣（ご立派なく大きな錦織の服の＞），粧次（化粧台の下），門下（門の下）」と署名の部分の「侍生（お仕えする人），端肅（つつしんで），拜（拝む）」などには，他の言語スタイルに現れない手紙文特有な敬辞表現が使われている。

近代小説に現れた手紙文の宛て名と署名の部分に焦点を当て，その敬辞使用の特徴を見てみ

たい。(手紙の本文は…で省略する)

- (33) 父親大人万福金安…男芸跪書。(父上様…芸頓首)『紅』37章
- (34) 占村親台足下…国棟頓首。(親戚の方々御中…国棟頓首)『蟹』15章
- (35) 雲卿小姐粧次…黄玉史百拜。(雲卿お嬢様…黄玉史頓首)『駐』7章
- (36) 謹致書于大三元婿玉史黄公子文几…妾吳緑斂衽百拜。(三元婿玉史黄公子様…吳緑頓首)『駐』20章
- (37) …伏乞聖覽。(…頓首)『白』10章
- (38) 大徳西門親家見字…眷生陳洪頓首。(西門親戚殿…陳洪頓首)『金』17章
- (39) 大徳望西門大親家老夫人粧次…眷末喬門鄭氏斂衽拜。(西門奥様…喬門鄭頓首)『金』40章
- (40) 大柱史少亭曾年兄先生大人門下…寓都下年教生黄美端肅書奉。(史少亭様…黄美頓首)『金』48章
- (41) 情郎陳大官台下…賤妾韓愛姐斂衽拜。(陳様…韓愛姐頓首)『金』98章

宛て名の部分で使われた敬辞「大人、大徳望、大官、大柱」などは、大きさのメタファーを通じて相手を表現するもので、「万福(ご清祥<たくさんさんの幸福>)」, 金安(ご健勝<金の健康>)」などは、相手の幸福と健康を数量の多さを表す「万」と価値の高さを表す「金」によってメタファー的に表現したもので、「足下、机下、門下、台下」などは、相手の社会的地位を物理的高さに基づいて表現したものである。「～下」は自分からの手紙は相手に直接受け取ってもらうほどのものではなく、相手の居場所の隅っこの方(門の下、足元、机の下、化粧台の下、台の下など)に届けるものであることを意味する。そして、署名の部分では自分のことを「眷生<親戚の若い者>、眷末<親戚の最も立場の低い者>、教生<教え子>、賤妾<賤しい妾>」などと表現し、「頓首<おがむ>、斂衽<お辞儀する>、跪書<ひざまづいて書く>、百拜<百回拝む>、伏乞<伏せてお願いする>、拜上<拜んで差し上げる>」などは、自分が手紙を書き、届ける場合の姿勢を、ひざまづく、拝む、伏せるなどといった姿勢の礼行為を行っているようにメタファー的に表現したものである。

このような敬辞は、近代中国語において話しことばを含めて一般的な表現として広く使われたものではなく、書き言葉で、しかも手紙という特殊な文体条件によってその使用が規定され制限されていたものである。

6. 共起関係の文脈条件

敬辞の中で、「奴(私)、弟(私)、登(参る)、仰ぐ(伺う)」などのように、単独で文の中の主語、目的語、述語などの主要成分になるものもあれば、「尊～、大～、卑～、小～」などのように他の主要成分を修飾する成分として機能するものもある。後者の場合、修飾成分

としての敬辞と修飾される成分との間に共起関係が成立する。修飾成分も被修飾成分も互いにどこまで共起できるかによって一種の関係領域が形成される。敬辞の立場から見ると、一つの敬辞はそれと共起できる語彙領域が存在し、逆に、被修飾成分の立場から見ると、一つの語彙には、それと共起できる敬辞の領域が存在する。以下、修飾成分としての尊辞「貴くとうとい>」と「大くおおきい>」、被修飾成分の「名くなまえ>」と「顔くかお>」を例としてそれぞれの共起領域を比較することにより、敬辞の共起関係文脈条件が持っている複雑な様相を観察することにする。

まず、尊辞「貴」「大」の共起領域を見る。(語例出典は文献リストの作品に基づく)

貴	[居場所:]	国, 邦, 府, 郡, 県, 村, 城, 郷, 處, 地, 校, 寓, 宅, 宮
	[身体, 病氣:]	体, 目, 手, 足, 歩, 恙
	[人間関係:]	友, 老師, 相知
	[年齢, 誕生:]	庚, 誕, 降
	[姓名:]	姓, 名
	[教え:]	教
大	[親族名称:]	伯, 爹, 審, 哥, 嫂, 娘
	[人間関係:]	先生, 人, 官
	[作品:]	筆, 作, 稿, 章, 著
	[手紙:]	函, 翰, 札
	[教え:]	教, 示, 鑒
	[姓名:]	号, 名
	[心情:]	恩, 志
	[移動:]	駕

「貴」と共起する語彙領域をまとめると、「居場所」、「身体, 病氣」、「人間関係」、「年齢, 誕生」、「姓名」、「教え」などの概念を表す語彙が中心になっているが、「大」と共起する語彙領域は「親族名称」、「人間関係」、「作品」、「手紙」、「教え」、「姓名」、「心情」「移動」などに関する概念を表す語彙が中心である。双方共通の共起領域は「名」と「教」だけで、その外はすべて異なる語彙で、共起領域が重なることはない。この現象から、敬辞語彙間の役割分担の作用が働いていることを見て取ることができる。「貴」、「大」は、それぞれ以上示した領域の語彙としか共起できないという規則が存在するとまでは断言できないが、実際共起している語彙から、このような共起範囲の傾向性が見えてくる。「貴」と「大」の共起領域の重なり具合は図1のように示すことができる。

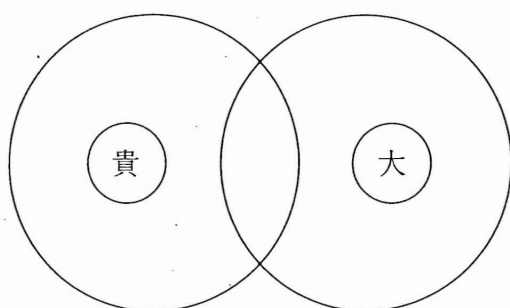


図 1

次に、被修飾成分の立場から一般名詞「名<なまえ>」と「顔<かお>」が共起できる敬辞の領域を見てみる。

尊, 芳, 清, 仙, 貴, 大, 高, 賢, 英——名

尊, 芳, 清, 仙, 台, 玉, 芝——顔

「名」と共起する敬辞の内、「顔」とも共起するのは、「尊, 芳, 清, 玉」の四つであり、「名」と「顔」を修飾できる敬辞は図 2 に示されたようにかなりの程度共通の共起領域を持っていることが分かる。

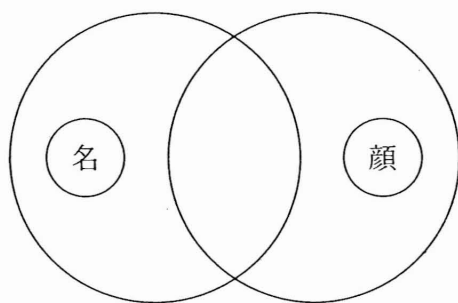


図 2

これらの現象から、敬辞とその被修飾成分との間に、共起できるものとできないものがあり、共起できるものの中で、ある程度の選択の幅が与えられるという現象が観察される。(敬辞共起関係の複雑な様相に関する詳細な記述は、彭 1995eを参照されたい)

7. 結び

近代中国語の敬辞は上述のように非言語的文脈条件(文化的価値観, 人間関係, 場面)と言語的文脈条件(文体, 語彙間の共起関係)などがすべて満たされて始めて言語の具現体として現れるのである。このような敬辞使用の文脈条件のプロセスは次の図 3 のようにまとめることができる。

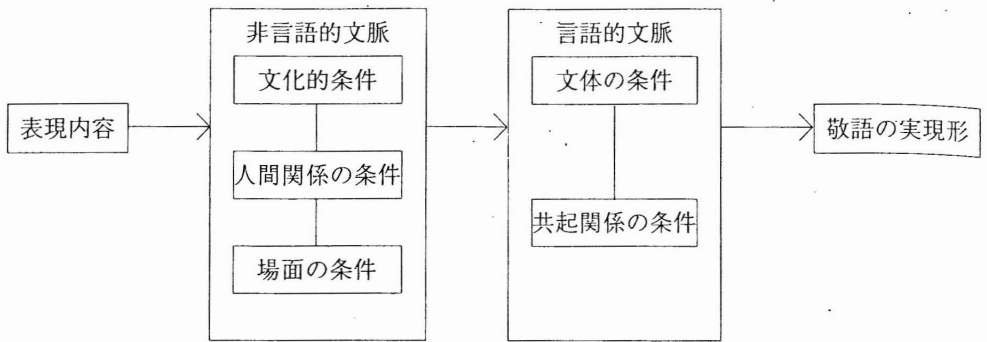


図 3

用例出典：

略名	書名	著者・編者	版本	年代	新版	新版年
『三』	『三国演义』	羅貫中	大魁堂藏板刻本	14世紀(元)	齐鲁書社	1991
『金』	『金瓶梅詞話』	蘭陵笑笑生	万曆丁巳版	17世紀(明)	星海文化	1987
『玉』	『玉嬌梨』	夷荻散人編次	本衙藏版	17世紀(明)	春風文芸	1981
『好』	『好迷傳』	名教中人編次	萃芳樓藏版	17世紀(明)	広東人民	1980
『世』	『世無匹』	古吳, 娥川主人編次	金閨黄金屋刻本	18世紀(清)	春風文芸	1983
『駐』	『駐春園』	吳航野客編次	三除堂巾箱本	18世紀(清)	春風文芸	1985
『儒』	『儒林外史』	吳敬梓	嘉慶丙子版	18世紀(清)	上海古籍	1991
『紅』	『紅樓夢』	曹雪芹, 高鶚	庚辰本	18世紀(清)	人民文学	1992
『蟹』	『蟹樓志』	禹山老人編	嘉慶12年刻本	18世紀(清)	齐鲁書社	1988
『白』	『白圭志』	博陵, 崔象川撰	江左書林刻巾箱本	19世紀(清)	春風文芸	1985

参考文献

- Brown, P. and Levinson, S. (1987) 『Politeness: Some Universals in Language Usage.』
Cambridge University Press.
- Gu, Yueguo. 1990 「Politeness phenomena in modern Chinese」 『Journal of Pragmatics 14』p
237～257
- 顧 曰国 1992 「礼貌, 語用与文化」 『外語教学与研究』 4月号北京外国語学院
- 井出 祥子, 彭 国躍 1994 「敬語表現のタイポロジー」 月刊『言語』 9月号
- Ide, Sachiko, Peng Guoyue 1996 「Linguistic Politeness in Chinese Japanese and English from
A Socio-Historical Perspective」 『柴田武博士古稀記念論文集』 三省堂
- 興水 優 1977 「中国語における敬語」 『岩波講座 日本語 4 敬語』 岩波書店
- Lakoff and Johnson 1980 『Metaphor We Live By』 The University of Chicago (和訳『レトリックと人生』 渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸訳 1986 大修館書店)

- Leech, Geoffrey. N 1983『Principles of Pragmatics』Longman Group Limited (和訳『語用論』池上嘉彦, 川上誓作訳 1987 紀伊國屋書店)
- 小野忍, 千田九一訳 1972『金瓶梅』平凡社
- 彭 国躍 1991「明代中国語の敬語とその語用論的方略——『金瓶梅詞話』の会話文分析」『中文研究集刊③』白帝社 p29~52
- 彭 国躍 1992「対人関係の修辞法としてのメタファー」日本言語学会代105回大会口頭発表
- 彭 国躍 1993「近代中国語の敬語の語用論的考察」『言語研究』日本言語学会 p117~183
- 彭 国躍 1995a「近代中国語敬語体系の研究——日本語, 英語との対照を視野に入れて」博士(文学)学位論文 大阪大学
- 彭 国躍 1995b「近代中国語敬語体系の理論的枠組み——陰陽世界観に基づく対人関係の認知システム」『富山大学人文学部紀要』第23号 富山大学
- 彭 国躍 1995c『金瓶梅詞話』の年齢質問発話行為と敬語表現——社会言語学的アプローチ『言語研究』第108号 日本言語学会 p24~45
- 彭 国躍 1995d「メタファー類似性問題の一考察——類似説と創造説の隙間」『日本学報』第14号 大阪大学 p134~158
- 彭 国躍 1995e「近代中国語の敬辞とその被修飾成分との共起関係——親族名称を中心に」『中国語学』第242号 日本中国語学会 p104~114
- 藤堂 明保 1974「中国語の敬語」『敬語講座第8巻 世界の敬語』明治書院 p139~162
- 辻村 敏樹 1992『敬語論考』明治書院